

残紅



六花

Studio ***46



目次

プロローグ	1
†開幕	3
†①† 二つの風花	5
†②† 生贄達	9
†③† さざなみの火	15
†終幕	20
エピローグ	22

プロローグ

「力」ある者とは、世界を構成する欠片だ。だから「力」でない「人間」が死んだ時は、世界に還らず天に送られる。

人間以外の「力」ある化生は「時の闇」という軸に還り、再び生を受けるために光を貯める。対して天使に葬送される人間は、天の光に直接還りゆく。光になった者は輪廻を否定されるとも、「力」ある化生より早く生まれ変わるとも言われる。

そんな座学を思い出しつつ、天使見習いの汐ノ香^{しおのか}は途方に暮れた。

目の前の川辺には天に送られるべき死霊の少年と、少年を驚かせた化け物、黒い大きな狼^{またが}に跨る癖毛の少女。

「嘘……俺、もう死んでんのに、天国行きを拒んだらコイツに喰われんの……？」

それは誤解だ。そんなつもりで汐ノ香は、この場に助っ人を頼んだわけではない。

天使とは光で作られた天の使い——天の主直属の御使いになる。確かに連れてきた助けは天使ではなく、いかにも凶悪そうな裂眼の狼もいるが、それより灰色の癖毛の少女が無責任に、笑顔で煽ることの方が問題だった。

「そうですね、勝一君。私も忙しいんです。言うことをきいてくれないと、このコが絶対勝一君を食べないとは、約束ができません」

これは確実に人選ミスだ。仲介をした上司の無害な笑顔が、汐ノ香の脳裏で赤く点滅していた。



<https://www.novelabo.com/books/6344/chapters>

十 開幕

天使の仕事は、意外に手ぬるい。

久しぶりに外の世界に出られて、灰色の癖毛の少女に最初に浮かんだ感慨はそれだった。

「いいですか、ローズさん。地上に残る死者は確かに厄介ですが、排除すればいいというものではないんです。助けてもらう身でこんなこと言いたくないんですけど、お願いですから、私に任せて下さい！」

川辺の地縛霊手前な少年から一度離れて、少女の使役者が必死に訴えてきた。

自然と少女には微笑みが出る。淡い白緑の可愛いふわふわ髪のアナジェが、今回の使役者。

「ごめんなさい、汐ノ香様。竜の墓場では、これが当たり前だったもので」

十二歳で死んだ人間の娘、という天使と、永遠に子供である少女は背格好が近い。この機会に是非仲良くなりたい。それがこの度、本来は竜の墓場にこもる少女が、外界に出る要請を引き受けた大きな理由だ。

「汐ノ香様も、気を付けて下さい。私は正式な番人じゃないので、汐ノ香様を見逃せます。でも汐ノ香様が竜の墓場に一步でも入れば、闇に還されなければいけない死者ですからね、汐ノ香様も」

ご安心を、のつもりで言ったのに天使の顔が曇った。狼の足下で森の日差しもかげる。

「あの、ローズさん……それ、本当なんですか？ 私が、竜の墓場に行くべき末裔だった、っていうお話……」

「まあ。他のヒトならともかく、ロゼなら、竜のヒトを見過ごしたりしません。汐ノ香様が秘める六花の『力』——風雪の制御力は、まず間違いなく、竜種のレベルですよ」

竜とはそもそも、強大な自然界の「力」を意識すらせず使ってしまう、自然そのものの化生だった。この時代にはもうほとんどが滅んでしまったようだが、少女はかなり古い時代に、魔竜という凶悪な竜を見張るために、墓場に棲むことになった竜の仔と言える。

「でも私、雪なんて全然、使ったこと……」

「汐ノ香様が使われている光は、雪の『力』があるから容易に拡散ができています。本来光はそんなに簡単に、広範囲に扱えません」

あ、そうなんだ……天使がまじまじと己の両手を見ていた。

今回は天使の助言者として少女は喚ばれたので、隣に腰をつく護衛用の狼の足をさすりながら話を続けた。

「ごめんなさい。汐ノ香様には悪いのですが、私にも人間界でやりたいことがあるのです。なので汐ノ香様の見習卒業試験——異世界の死者を天に送るという仕事デビューは、早く済ませてしまいたいのです」

建前としては、竜に縁ある天使への助力。本音は別にある少女は、遠慮なく言った。「それ、アシエル様にも、手伝ってあげてと言われましたけど……ローズさんは、その、アシエル様とは敵対者だともきいて……」

「はい、その通りです。でも、汐ノ香様は、とてもいいヒトそうで安心しました」

これは少女の本心だ。死者の通り道である黄泉の一つが竜の墓場だが、世界の果てだとされる炎獄^{ゲヘナ}と竜の墓場に、ある理由で繋がりができてしまった。

炎獄を司る者が、ヒトの運命を弄ぶ^{もてあそ}「さざなみの天使」。今回助力する天使の汐ノ香も、これからはさざなみとして成長するはずの見習い天使だ。

けれど汐ノ香は少女から視ると、真っ当な竜種だった。自然に気位が高いが良心的で。

少女にはヒトの心——「力」の核を視る、心眼という特殊技能がある。少女自身は適性だけだが、遥かな昔から素因を預かっているため、必要な時にはそれで「力」を視れる。「汐ノ香様は、とても自然に竜の心を持っています。ヒトを不自然に翻弄するさざなみに、今後なるには惜しい方なのですけど」

「……」

天使自身、まだ見習いであり、さざなみのことはわからないと言っていた。少女も実際、内情を知るわけではない。ただ、少女が長年探す父の核を、炎獄に隠すのがさざなみなのだ。

この邂逅自体が、さざなみの仕組むお遊び。

そうして二つの風の花が、各々行動を始める。

†①† 二つの風花

長い間、竜の墓場で番人の助力をしてきた。

少女自身は番人ではないが、少女が不自然に竜の墓場に魔竜を閉じ込め続けるためには、交換条件だったと言ってもいい。

きびきびとしていてもお人好しそうな天使の汐ノ香が、少女の事情をきかせてほしいと言うので、護衛の狼に少し下がってもらった。

汐ノ香と二人で、人間界——地球と呼ばれる文明的な世界の、高いビルの屋上のふちに、夜更けに並んで座る。

陽が落ちた人間界の夜景が、少女は好きだ。番人の一人が持ち込んだテレビで知った光景。

「墓場には、時代と共に、何人か新しい番人が来ました。番人は基本的に生きている竜になるので、こうして外の世界に召喚されたり、外の世界の物を持って帰ったりもします」「なるほど……それでローズさんは、私より日本のことをよく知ってるんですね」

少女は実際、本当の意味では、汐ノ香より世間知らずだろう。竜の墓場という、自然物以外は番人の持ち込んだ物しかない黄泉で、魔竜達以外と関わったことはほとんどない。

それでも「人間界を知る竜」として、今回汐ノ香の試練、異世界仕事の付添いの依頼をされた。その本当の事情は、少女をさざなみに引き入れたいあちら側の都合だ。

「今回の召喚は、とても魔力の強い人間の方に力を借りています。だから私もヒトの姿で喋れますが、自力で外の世界に出ようとすると、仔猫の形をとるのがせいぜいです」

魔竜を閉じ込め、最早五千年はたっているのではないだろうか。その間に少女が外界に出たのは片手で数えられる程度で、いずれも長い時間ではなかった。

というのも、少女も決して、不死の存在ではないからになる。

「墓場では時間が流れない。正確には変化が自らは起こらないので、『力』を使っても循環して戻ります。後は不要に嵩む記憶を『心眼』で切り離せば、魂魄の消耗から訪れる寿命は防げますが、外の世界ではそうはいかない」

「……??」

「寿命とはつまり、ヒトを生かす魂魄の飽和です、汐ノ香様。天使の魂魄だって、天の翼が集めて供給する陽の光でしょう？」

「ええと……要するに、墓場だとローズさんは不老不死だけど、外に出ると寿命が縮む？」

「要旨はそれで合っています。強い召喚者がいれば消耗は最低限で済みますが、それでも私の竜の目も、外では削れます。元々私には一つしかない目で、この目自体が力を失えば、墓場で自分を保つ力も使えなくなるんです」

竜の目とは、自然の力を竜人にする命の基だとも説明する。少女が普段、身内から継承した心眼を使うのも、竜の目を守るためだ。

なので少女は、地上——外の世界に、長くいることはできない。少女にとって最も大事なものは、墓場で魔竜を閉じ込め続けること。

魔竜とはかつて、世界中の空を紅い凶器^{あか}に変えかけた禍^{わざわい}だ。その凶悪な力をさざなみが欲しがっているため、少女とは敵対していることも汐ノ香には正直に話す。

「じゃあローズさんは、魔竜を炎獄に渡すのは嫌で、墓場に閉じ込め続けていたい？」

汐ノ香が不思議そうに、隣に座った少女を紅い目で見つめてきた。まるで、魔竜がそうも恐ろしい禍であるなら、世界の果てに処分した方がいいのでは？　と言わんばかりだ。その発想は理解できる。

深い地獄の谷底であるため、世界の果てと呼ばれる炎獄は、世に居場所のない追放者の溜まり場だという。

汐ノ香は少女とさざなみの確執の原因、魔竜との関係性を知らないと視えた。汐ノ香の上司は知っている事情を、何故汐ノ香に教えていないのかは警戒する。

「汐ノ香様こそ、本当に、炎獄などの所属になって良いのですか？　汐ノ香様さえもしも良ければ、墓場に還る道案内をしますよ」

「うーん……私は、とりあえず天使になれば死なないでいい、としか聞いてなくて……」

墓場に逝くなら、それはすなわち成仏の話。汐ノ香が霊体でも生き続けたいなら、天使であるしかない。その気持ちも理解できた。

汐ノ香は少女と同じ故郷の世界で、魔物に殺されたために魂が残って、完全な死者にはならず世をさまよっていた人間だった。

天使は本来、世界樹という光と闇を母体に生まれる高次存在だが、汐ノ香のように元はヒトだったものでも天使に成れる。天の翼が保つ天使の体は光で紡がれる神霊の思念で、少女や護衛の狼のように、魔力と自然の力で編んだ仮初めの霊とは生態が違う。

「お互い、大変ですね、汐ノ香様」

ただ世に在ろうとするだけで、多大な力の回転が必要となるもの。今回外の世界にいることができる時間は、召喚者の魔力の最低量が保つ三日だけである少女は、苦しく笑う。

「ローズさんに時間がない事情は解りました。でも私、死者を急き立てて葬送することは、ちょっとあんまりやりたくなくて……」

「わかっています。なので汐ノ香様は、夜は休まれて下さい。私はその間に、私の目的を進めておきます」

汐ノ香の仕事を手伝いさえすれば、残った自由時間は好きにしていいい。その約束で少女は外の世界に出たのだ。汐ノ香はうっ、と、申し訳なさそうな顔をしていた。

陽の光を力の源にする天使は、夜は脆弱になってしまう。隠れて休んでいる方がいい。
護衛の狼を呼んだ。そのまま汐ノ香を背に、少女は狼に乗って夜の都に降りていった。

＊

少女も汐ノ香も、普通の生物ではないので寒暖を感じない。年末の深夜に出歩く人々はマフラーに手袋など、重装備が目立つ日本。

少女は父の遺品である首輪と洋服で観光地の自然公園に行く。少女の召喚者として魔力を提供してくれた、人間の女が待つはずだった。

夜には入れないはずの苑内で、冷たい木の長椅子に、その魔女は腰かけていた。

「お待たせ致しました。フィオナ・鷹^{たかの}野様」

「……ふふ。貴女が、ロゼ・シリーズですか」

人間にしては多大な魔力の気配。それでも人間を超えることもない、おそらく人間では最大級といえる女性が笑って言う。

「呼び立てしてすみませんね。私はここか、自分の事務所でしか『力』を使っては駄目で」

人間界とは一応、「力」なき世界とされる。人間界出身の強力な化生は存在するのだが、「力」でない秩序で構築されるべき世界だ。だからこの魔女のように、強い「力」を持つ異端者には、様々な制限や監視があると聞く。

少女もそうだが、「力」ある者達とは、その「力」が「意味」を成す場でこそ存在を容赦される。人間界とは本来縁のない少女には、この魔女の召喚という大義がなければ、少女こそ排除されるべき化け物になってしまう。

「運命を断ち切る刃。まさかそんな神紛いが、暗黒の風を介して私に接触してくるなんて」

魔女はただ、不思議そうな目で笑っている。ふわふわの金髪に碧い眼と、日本では珍しい容姿。テレビドラマに出る外国人そのものだ。

「シリーズ様は、どこで私をご存知になったのでしょうか。私にこうして真の名をお伝えになってまで、どうして召喚を望まれました？」

本来ならその問答は、召喚時にされるべきもの。少女に汐ノ香の補佐を頼んださざなみづてに魔女を動かしたので、今夜が初めての顔合わせなのだ。

異世界の少女、それも黄泉に棲む異端者と、人間界の魔女には何の縁もない。それでも、この魔女を召喚者として指定したのは確かに少女自身だった。

真夜中の雑木林の前で、背中がじわ、っと熱くなった。真冬の寒さを感じていないのに、自身に直結する「力」は静かに抑制する。

「……あなたには、腹違いの弟様がおられるはずです。フィオナ様」

「……——」

「あなたは弟様を助けるために日本に来た。私とはそこで出会うはずでした。私の本来のマスター……魔力提供者となるヒトも、あなたの弟様を助けることを望んだから」

ずきん、と激しい頭痛が背の奥から襲ってきていた。堪えなければ、と蒼い自身の眼の彩^{いろ}を抜いて力を発する。少女を支配しようとする、背後の暗黒に負けてはいけなかった。

やれやれ……と。魔女はわけのわからない様子ながら、少女を襲う異変に気付くように、不意に自身の肩掛けを少女にかけていた。

少女は眼をぱちくりとする。木の長椅子を立ち上がっていた魔女は、すらりと真っ白なツーピースで、金髪を軽くかきあげて言った。

「セリーズ様。その『力』をあまり使ってはいけません。私と貴女が、^{かおる}馨のために会う可能性があった事は解りました。でも、『ここ』ではない可能性を視ようとすれば、貴女には何か相当の負荷がかかってしまうはずです」

魔女とは、世界の原理を扱う魔道に^{ちしつ}知悉し、魔力で世界を動かすものだ。さすがというか、少女の存在の理も少しは察してくれたらしい。

少女は本来、「ここ」にはいなかったもの。「ここ」を選ばなかった存在でありながら、だからこそ今回、さざなみの依頼に応えた。

運命を弄ぶ暗黒の風。そうした炎獄に棲む天使達をどこまで利用できるか、これは少女にも賭けである大事な一手だ。幸いにも魔女がとても聡くて、かけてくれた肩掛けに滲む魔力が、背からの圧力を和らげてくれた。

「……フィオナ様が占いで知った通り、馨様には死期が迫っています。馨様の持った力は強過ぎて、人間の領分を越えてしまっている……全身の臓器はとくにぼろぼろで、最早、馨様の体を救う手立てはありません」

魔女は黙って最後まで聞く。少女も俯く。

魔女の弟は、人間であるのに、空間転位という異世界の化け物でも滅多に扱えない力を人間界で使っている。その恐るべき不秩序は、代償に体の破滅を招いていなければ、秩序の管理者が滅していただろう程の力だ。

魔女は魔道に通じるが故に、そこまで己を酷使せずに生きてこられただろう。魔女とは離れて育ちながら、共に強大な力を持つ弟の存在を、魔女が知るのが遅過ぎたのだ。

「馨様の、体は救えません。でも、魂だけは、この世に留める方法があります」

「貴女はわざわざ……私にそれを伝えに？」

魔女が訝^{いぶか}しむのも当然だった。この話一つだけでは、少女にメリットが存在しない。

実際のところ、この出会いはデメリットすら増やし得るもの。少女を世に存在させられる本来の縁者が、ここで魔女の弟を留めれば、少女に魔力を渡せなくなる。そこまでしても魔女の弟を本当に助けることはできず、少女もこの世に^{あらわ}姿を顕せなくなる。

それでも魔女の弟が留められることは、変えられない流れに視えた。それなら少女は自ら魔女と縁を作り、少女をこの世に召喚できる相手を増やしておきたかった。

「私の目的は一つです。あなたの言う暗黒の風が、私を利用しようとするなら乗りこなす」

おそらくそれは、汐ノ香の無意識の望みと同じだった。暗闇にかすかな光が漂っていた。

†②† 生贄達

少女は「ここ」を、選ばなかった。

僅かな休息を狼の懷の内でもとりながら、夢の中でも襲い来る赤い気配からぎりぎり距離を置く。

「ここ」にある人世には、少女が介入する余地が無かった。少女が閉じ込める魔竜から太古の「力」を引き出す巫女が在ったことと、それによって、少女の魔竜は表舞台に出ずに済んだからだ。

少女の魔竜を無理やり世界に引きずり出して、世に「力」を示そうとする適合者があ
る時にだけ、少女は大事な魔竜の代わりに世に出て、禍を未然に防いできた。

「.....——お母、様.....——」

柔らかとは言えない黒い毛並みで、少女を包み込んでいる狼にしがみついた。

この狼も本来、「ここ」を選ばなかった。だから少女と共にこうして、暗黒の風に乗っ
ていける。

朝陽がしっかり昇ってくると、短い休息は終わりを告げた。先に起きていた汐ノ香が、
勝一君の所にいってくるから、ローズさんはまだ休んで下さい、と言っていった。

少女の役目はあくまで助言なので、その都度汐ノ香についていなくても確かに良い
のだろう。

「.....あと二日で終わりそうにはないけど、どうしたものでしょうね」

多感な少年の死霊相手に苦戦する汐ノ香。口すらきいてくれない、と早々に帰って
きた。

どんな所でも動じず、天使の仕事の一つ、死者の葬送ができるように、汐ノ香は異世
界の人間の葬送を最初の仕事にされた。人間界の常識が全然わからず、少年にどう取っ
つけばいいかわからない、と肩を落としていた。

少女と汐ノ香が潜伏するのは、護衛の狼もいられる山中の展望台だ。人間に少女達の姿
は見えないとはいえ、堂々と街中にいると、靈感の強い者に見咎められる可能性はある。
「汐ノ香様は、優しいですね。私ならすぐ、相手の意識を断って終わりにしちゃいます」
「うう.....魔物相手なら私もそうするけど、勝一君が鋭いからかな、ちょっと可哀相で。
でも、ローズさんの方が正しいと思う.....」

葬送は仕事だ。対象に感情移入を始めるときりがなくなる。おそらく霊的な素因があり
意識が消え残る死霊の少年に、同じく元々は死者の身だった汐ノ香が引きずられている。

魔物相手なら、という言葉が憐れだった。汐ノ香は魔物になりかけている。さざなみの
天使として在るから問題にされていないだけで、紅い瞳の霊体は紛れもなく魔性^{しるし}の徴だ。

「……お昼は、ロゼと一緒にもう一度勝一君に逢いに行きましょう。汐ノ香様」

「え？」

私に奥の手があります、と汐ノ香に伝えた。背後からまた暗黒の圧力がかかってきたが、あの川辺にも少女に視える流れが一つあった。

力の温存を兼ねることと、汐ノ香自身での仕事の打開のために。少女は灰色の仔猫姿、仮称「アーク」になると、汐ノ香に抱かれて川辺の少年と一緒に会いにいった。

結果は靨面で、少年は猫が好きであること、猫を助けるために死ぬことになった事実など、少年の心残りが次々と汐ノ香に伝えられた。

「じゃあ、勝一君は、助けた猫が気がかりでずっとここで待ってるの……？」

少女は何も口を挟んでいない。ただ、少年と箱に入った猫がうっすら視えただけだった。それは暗黒の風が伝えてくる「ここ」の情報で、汐ノ香に直接にはではなく、少女の心眼へ訴えてくるのがあざとくて閉口してしまう。

さすがに助けた猫の行方までは判らずで、その場ですぐに少年を葬送はできなかった。けれど汐ノ香と少年の距離はかなり縮まり、これはあともうひと押しだろう、と、拠点の展望台に帰ってから冷静に伝えた。

「本当にありがとうございます、ローズさん。結局私の我が侘に寄り添ってくれて、勝一君の葬送の方法と一緒に考えてくれて……」

死霊の少年に散々撫で倒されて、仔猫からヒト型に戻った少女も満更でもない。墓場で死者を片付けるならもっと荒い手を使うが、人間とゆっくり向き合ってみるのもたまには悪くない、と少女も感じていた。

「汐ノ香様が優しいからです。ね、スカイ様」

ずっと無言で少女達の傍らに佇む^{たたず}、黒い狼の足にもたれこむ。

汐ノ香がはっとした顔をして、少女達より大きい狼を見上げた。

「この狼さん、スカイさんと言うんですか？」

「はい。スカイ様の落としていった『力』の一部なので、そう呼んでいます」

護衛用に、と、外の世界で改めて形にした黒い狼。狼の姿をしているのは、少女が実際形にできるほどよく見たことのある動物が、黒い狼しかいないことも大きい。

「これは内緒にして下さいね。お母様が酷く心配するので、スカイ様はこっそり『雲居空』^{くもいのそら}の力を借りて狼にして、ロゼの護衛になってもらいました。でも本当は反則なんです」

「反則？ どうしてですか？」

「『雲居空』の、本来の持ち主に内緒なんです。『雲居空』を預かる巫女様が、魔力も含めてロゼに回して下さっています」

反則の理由はそれだけではない。まずその巫女が、さざなみの天使になりかかっており、墓場にいる少女に生者でありながら接触してきた。

「雲居空」だけならただ青い光となったはずの狼も、少女の眼を通して極夜^{きょくや}という玄^{くろ}の水を混ぜて、黒い狼の造型を保っている。「心眼」とは「力」を視るだけでなく、簡単なことなら状態への介入、禁断の業なら違う「力」に変えてしまうのも不可能ではない。

「スカイ様は、本来、ここにいないですから」

「雲居空」が在ればここにあって良いはずの青い狼を、「雲居空」と極夜を合わせて再現した黒い狼。

こんな黒い狼が本当はいたはずなのだと、暗黒の風が伝える情報の一つだ。この世界に全く有り得ないものまで創り出すことは、心眼でも難しい。少しでも可能性が在るなら利用している状態になる。

「スカイ様の狼の素因を継げるヒトが、ここにはいないんです。あくまでこれは、素因に過ぎなくて。馭者は囚われたままなので、どの道適合者がいないと狼にはなりません」
「.....??」

さざなみの天使になっていくはずの汐ノ香が、その情報を解らないこと。少し安堵する。

「よくわからないですけど.....じゃあ、この狼さんは、使い手未定ということですか？」
「その通りです。汐ノ香様は、わからないと言いつつ正鵠をつかれますね？」

使い手不在でふらふらしている力なので、墓場を出る少女の護衛に、一時的に変えた。モデルは母の影に棲む黒い豺狼で、それより多少大きくなってしまった。「雲居空」本来と同等の力を受ければもっと巨大化するだろう。

「雲居空」以外から力を受けても、この狼なら強大な威を成す。本来ならば、「空の光」となるはずだった青い狼。けれどその馭者が失われた時、狼の素因だけでも奪取するのに苦労したことを少女は思い出した。

「『力』は、素因と原料、そして『意味』——制御力がなければ『力』と成らないことは、汐ノ香様もご存知ですね？」

え、えっとー、と汐ノ香がごによごによとし始めた。魔道の常識についてはどうやら、これまで興味がなかったと見える。竜種とは魔道を知らずに自然に「力」が使える化生であるため、よくある態度でもある。

少女の次の予定までまだ少し時間があり、展望台に座る狼の懷に二人でもたれる。

少し苦労話をきいてくれますか？ と尋ねると、はい！ と汐ノ香は嬉しそうに頷いてくれた。

「私は魔竜を閉じ込めるために、竜の墓場にいたことはお話しましたよね？」

「そうですね。その話と何か関係が？」

「魔竜の力を欲しがっているのは、さざなみだけではないですよ。墓場に在る魔竜は、正確には素因で、魔竜の力を魔竜の形にする大元です。スカイ様が狼の形になるように」

「竜」は、動物の一種とも捉えられるが、その形には様々なパターンがある。自然界の「力」を何かの形で運用するため、「竜」の姿は個々の適性が反映されることが多い。「太古の魔竜は、流れる川のような黒い形。それが墓場に在る素因だからです」

しかしある時、そのさざなみは顕れていた。まだ運命の夢の預言を持たないでいたのに、新たな魔竜を作り上げる、白い夜の花火が。

＊

墓場に在る魔竜の「力」の一つが、ある時突然、壊される異常事態があった。魔竜には二つの「力」の媒介があり、一つは長く聖地の水底で封印されているが、もう一つは人世で竜種が受け継いできた「極夜渦」といった。

「極夜渦」は媒介でありながら素因を併せ持つ宝で、墓場の魔竜は「極夜渦」を使えるが、素因を持つ負荷はかからない状態だった。その媒介が破壊されたため、「極夜渦」が本来持つ自然界の「力」が、そのまま墓場の魔竜に流れて戻ってきた。当時には墓場の魔竜が最も「極夜渦」にふさわしい器だったからだ。

——このままではお母様が変質してしまう。

本来なら母の影に棲む豺狼が、「極夜渦」の昔の器だった。しかし長い時を経て豺狼は、月の鬼火にしか適合しなくなった。そもそもそれが本質だったらしく、極夜の力は全て、魔竜である母が引き受けることになった。

少女はその問題を何とかするため、初めて外の世界に出ることにした。「極夜渦」を破壊した存在も新たな魔竜だともっばらの噂で、原初の魔竜である母に影響があるかどうか、確かめに行く必要があった。

しかし召喚者のあてが全くなかったため、この時初めて、母がさざなみの天使と縁故があることを知る。かつては少女の育ての父が、炎獄の者だったことに起因していた。——娘には教えるな。それが魔竜の内に潜む条件の一つだから、君に会ってしまった以上、私が魔竜に潜む力は、大分弱まっていくよ。

そう言って母の体を使うさざなみの天使は、少女に外の世界に行く方法を教えた。母にはその後、大分無言で止められたのだが、少女を抱きしめる腕を振り払ってでも、外の世界に行かなくてはいけないと感じていた。

ずっと墓場に力を潜めて、母は魔竜などという禍が、二度と起きないように望んでいた。

それなのに世に顕れてしまった、新たな魔竜。

——お母様自身じゃないとしても……こんなタイミングで、『極夜』の力が関わっていない魔竜なわけがありません。

自然の化け物である竜には、魔力を持つ者がほとんどいない。強い気と魔力は同じ体内で共存が難しく、竜種は霊気の化生が普通だ。

召喚とは中位の魔道になるため、魔力ある召喚者が必要となる。召喚以外で黄泉の扉を開く方法、特に生者である少女が外界に出るためには、生者の出入りが必要だった。

——誕生の芽ならそこにあるよ。君の母上を苦しめる『極夜渦』は、まだ生きているから。

母に流れ込んできた力。そこには何故か、極夜の大気だけでなく、青い海の力が混ざり込んでいた。異種の「力」が交じる時には、一方だけでも生者であるなら、心眼の反則を使えばそこから新たな竜を創り出せる。

「そうして私は、極夜から『渦』を分離して、青い海の力を与えました。『渦』が生まれる道についていて、私も初めて外に出たんです」

「そ、そんなことが.....心眼って、とにかく凄いんですね.....」

少女の母に極夜渦が逆流したこと、それを心眼で弱めたことや、心眼というものの自体の話^{いにしえ}を汐ノ香にはした。ただ一応、その母こそ古の魔竜なことまでは話していない。

「凄くないです。私自身は知識でしか心眼の使い方がわからなくて、霊体一つでも、外で動くのは本当に大変だと思い知りました」

「そうなんですか.....天使はその辺、じゃあ恵まれてるってことですよ」

汐ノ香の言う通りに、天の翼が天使に供給する魂魄は破格だ。四六時中ヒト型をとれて、明瞭な意識でヒトと話せて、「力」まで使える。少女はうろ覚えの小さな猫の姿しかとれず、新たな魔竜の情報収集もろくにできなかった。

しかし極夜の渦の元から調査を始めたので、魔竜の裏に暗躍する災いにはすぐ辿りつけた。それ以外には収穫が無かったとも言えるが、母と約束した力の量で動ける短い数日の間に、少女が最も知るべき宿敵はわかった。

「新たな魔竜のことはわかりませんでした。でも極夜の竜を利用して禍を起こしたのは、私が伝え聞かされてきた敵だった。その時に本当に狙われたのは、『雲居空』でした」

「雲居空」は、護衛の狼の素因を、狼型の「力」にする原料と言える。

「力」とは魔力や気や霊力といった原料がなければ、そもそも「力」にならない。自然界の「力」、竜が自然現象になるための媒介の一つが「雲居空」だ。

「古い神々が『雲居空』を使う前に、素因の狼だけでも私が奪いました。半信半疑だったけれど、白い夜と悪い夜に竜の力を奪われてはいけない、そう聴いて育ってきたので」

「『雲居空』は狼の素因じゃないと、竜の力にならない.....使えないということですか？」

「狼の姿に、大きな意味はありません。狼の素因を持ったヒトが適合者だっただけです。これで『雲居空』の力だけは死守できました」

そして母に^{さかのぼ}る極夜を、狼の素因に流した。当時の少女にできたことはそこまでだった。

白い夜と悪い夜、そう呼ぶ神々は原初の魔竜から分かれた者で、育て親に「力」模様を教え込まれていなければ判らなかつただろう。

魔竜を使いたいのはさざなみだけではなく、神々という地上の闇にも狙われていること、それがよくわかった初めてのお使いだった。

「悔しかったのです。ロゼには闘う力なんて全然なくて、白い夜も悪い夜も止められない」
「.....」

「お母様は強いのに、私を鍛えてくれません。戦闘の才能がないのは、自分でも解るんです。汐ノ香様みたいに私は自然に力を使えない」

汐ノ香は一見、無害そうな天使に見えるが、戦闘力は高い方だと少女は思った。武技など全くない魔法攻撃型ではあるが、天使なので体の負傷という制限がなく、一方的に相手を光で攻撃できる。

少女は狼の背から光の刃を撃てないことはないが、精密攻撃はできても大規模な「力」を扱える力は持っていない。今この少女である限りは。

「竜の墓場は、戦いが絶えないんですか？」

「竜人が滅んでからは、大分減りましたよ。墓場にいる限りは、どんな化け物が頭れても大体お母様が片付けてくれます」

それなら人世の禍まで、少女が気にかけることはない。汐ノ香はそう言いたそうな顔だ。

少女も、人世と完全に縁を断てるならその方がいい。母も少女も、力の縁者か適合者が現れた場合、「力」として召喚され得てしまう。人世だけでなく炎獄からも有り得る話だ。

そして少女は、父を隠す炎獄こそ探りたい。汐ノ香と仲良くするのがその足がかりだ。

竜でないので墓場に留まることができない父は、母と接点を持つため炎獄に潜む素因を得たと聞いた。母を炎獄に行かせないで済むよう、流転する父の「力」を少女は探し続けている。

今ではもう、外の世界の事を教えてくれる情報源が大半無くなってしまった。元々僅かな縁ではあるが、「ここ」では少女に関われる相手が本当に少ない。信頼できる協力者が。

陽が沈んでから、少女は護衛の狼と共に、また汐ノ香のそばを離れた。汐ノ香は勝一の家を見にいつてみる、と言っていた。

「故人の事をなるべく調べる。筋が悪くないですね、本当に汐ノ香様は」

三日しかおそらく人世にいられない少女は、二日目の今夜の目的へ赴く。人間界で少女がこの先、万一にも縁を持ち得る相手の元へ。

人間界に幾人かいるはずの、現代の魔竜の関係者には、関わらないと先に決めていた。本来ならそちらこそ縁が深いものの、その中には「雲居空」を使う巫女——今後さざなみになる者がいる。それより少女は少女と同じ、「ここ」では立場のない相手を引き上げる。

明かりを落として真っ暗な教会の礼拝堂に、一人の女が膝をついて祈り続けていた。少女とは何の縁もない女であるのに、少女が狼と共に礼拝堂に入っすぐ気付かれていた。「.....あなたなの？ ^{かなえ}歌秧を助けてくれる、地獄の御使いは.....——」

女の足下の床には複数、赤い血で描かれた悪魔の円陣。信仰者なら決して手を出してはいけない背徳に、もう染まってしまっている。

「.....それは、取引次第です。さざなみからどうか、手を引いて下さい、^{おとぎし}の音戯詩乃様」

「ここ」では、救われない生け贄。

光の無い教会の中、少女はひたすら頭痛を抑えていた。

†③† さざなみの火

この世界は、何かがおかしいと思わない？

「雲居空」を使う巫女が、生きているのに竜の墓場にわざわざ来ると、少女だけを相手に選んで目的を話した。「ここ」では少女と、その母が生け贄にされてしまう未来を。——あなた達は本当は、まだ人世に関われる。それなのに『ここ』では、いないものになる。それがさざなみの求める生け贄。あなた達の代わりに世に出る、さざなみの天使のために。

話は全然解らなかった。それでも巫女曰く、少女は自ら「ここ」を捨てたらしい。少女が得るはずの名前を忘れて、炎獄の翼を得て。

——勇気ある判断ね。あなたの眼なら確かに、さざなみに吞まれず、力だけを利用できる。

それで少女の立場が「ここ」から消えても、それこそが炎獄まで、父を探しに行ける素因。

そうしなければ少女に他に、父を探す手段はなかった。「ここ」ではない何処かと違って、少女を外に連れ出す「悪神」がいないから。

——……助けられなくてごめんなさい。でも、この縁があなた達に、未来の居場所をつくることを祈ってるから。

さざなみに囚われることが解っている巫女。何をするためでもなく、ただ可能性を教えに来たのだ。

知らなければ見過ごすだけの火種。父が囚われた事も少女には隠されていたから。

教会から帰る道の途上で、少女は狼の背にしがみついた。鬼気として自らの血で禁断の召喚を続けた、生け贄の女性の姿が辛かった。

「救われないものの存在は、なかったことにされる。頭でしか解りませんが……あれがきっとそうだったのですね、スカイ様」

「ここ」でなければ、女性はあのような姿に追いつめられることはなかった。その違いが少女の背にある、炎獄の翼で薄らわかる。

「こんな翼、ほしいとは全く思いませんけど……これがないと、私も生け贄でしかない」

母の体に潜伏する方のさざなみの天使は、少女に炎獄の翼を渡した。父を探したいなら、その願いだけでもこの「力」がいるだろうと。

一応受け取った炎獄の翼。完全には少女と同化させずに、「力」を借りるに留めている。

さざなみの翼とは、有り得る様々な世界の姿をよく見せてくる。運命を弄ぶさざなみという存在は、「ここ」以外にも違う未来や過去があること。そして今この現実にも分岐点があると、そんな無茶を教える「力」なのだ。

「.....怖い、です。スカイ様.....」

「雲居空」の巫女に教えられていなければ、そもそも「ここ」でない何処かがあるという、全体像がわからなかった。炎獄の翼が断片的な「違う何処か」を見せてくる度、それらが「ここ」と違うもので、何かを変える分岐であると、そもそも思いはしなかっただろう。

その違和感がいったい何を変えて、どんな未来に繋がっていくか、少女は何も解らないのだ。それなのにただがむしやりに、ふっと見えた違いに取っついていただけ。

「今の私は、この道は、お父様につながっていますか.....？ スカイ様..... 風様.....」

「雲居空」の巫女の頼みで、少女の護衛になってくれた狼。

こうして少女を無言で守る狼の姿を、信じるくらいしかなかった。そうして少女に身を守る術を増やして、その先を見ているはずの、さざなみの巫女を。

「さて.....最後の明日は、果たして本当に、会えるのかどうかですが.....」

「ここ」ではない何処かで、汐ノ香は川辺の少年を、きちんと天に送った。

「ここ」では初めに少女が少年を脅して、汐ノ香が少年をかばったことが効いたか、少年は早々に心を開いて、汐ノ香に運命を委ねたようだった。

「勝一君、無事に葬送できました」

三日目の夕方、汐ノ香が悲しげな顔でそう報告した。少女が付き添うまでもなかった。「お疲れ様でした、汐ノ香様。光がほとんど無くなっているので、今日は休まれて下さい」

人間界では、力の枯渇が故郷よりも早い。でも、と汐ノ香が、少女を紅い瞳で見つめる。「ローズさんは？ ヒトの世界にいられるの、確か今日までなんですよ？」

呆気なく最初の仕事が終わっていたので、汐ノ香の様子にはまだ余裕がある。

それでもこれから少女が起こす事に巻き込んで良いか、少女は束の間、苦い顔で悩む。「.....考える暇はありませんね。もし、私を汐ノ香様が気にして下さるなら、ついてきて下さい。うっかり巻き込むかもしれませんが、自己判断で逃げて下さい」

はい？ と首を傾げる姿が可愛い。たった二日と少しを一緒に過ごただけであるのに、汐ノ香はもう少女を信頼している。

「これから私は、炎獄にお邪魔しますから」

え。さすがに啞然としたものの、狼に乗り移動する少女の後を、汐ノ香が必死に追ってきた。

初日に魔女と会った観光地まで来た。池が多いその公園は、魔女の実家が出資者の一人らしい。

異世界者でも力を使えそうな霊地であるので、今日は早めに閉園するよう魔女に頼んだ。私の一存じゃ全然無理なんです、と文句を言いつつ、各所にかけてくれた。

「汐ノ香様。もしも良ければ、夕焼けと共に、^{うた}唱ってほしい聖歌があるのですが.....」
炎獄の扉は、少女の心眼で何とかしようと思っていた。けれど他ならぬさざなみの天使の助けがあれば、そちらに任せる方がいい。
「あと.....これから私がどうなっても、何が起^{おこ}こっても驚かないで下さい」
そうしてその夜、闇に隠された水門が開く。ただ少女の望み一つで。

＊

生け贄がいるなんて、困った話だよな、と。
父ともし話せたのなら、あの気安さで一緒に悩んでくれたのだろう。
「生きたお父様に出会えなければ.....お母様の今世の^{うつしみ}現身を救えなければ。誰かを犠牲にしないと、二人は一緒にいられないなら.....」
「ここ」でない何処かでは、命が尽きた父の残滓を「悪神」にされる少年が持ち続けた。少年は少女と母を外に連れ出し、少女も母も、闇を生きられる違う姿に変えた。
少年を闇に堕としてまでも、父が戻る道を探し続けた。それでも結局、見つけることはできなくても。

ただ、家族で過ごしたいこと。それだけの望みであっても、竜の墓場に居続ける少女と母には、父は父自身の姿では再会ができない。
「私とお母さまが、竜でなければ.....普通のヒトは、死んだら会えたのでしょうか.....？」
死後の混沌で、数多の化生はどんな末路を辿っていくのか。誰もそれを、本当に知っている者はいない。世に同じ「力」が顕れたら、心も同じであろうということ、その前提だけが転生と再会を担保している。
心を視られる少女自身が、それを一番実感できているはずなのに、さざなみの火がたやすく違う世界を映していくから、心など所詮運命に勝てない、そう不安になってしまう。
ヒトは死ねば、それで終わり。あまりにも当たり前である結論を、死を遠ざけた少女がわかっていないだけかもしれない。いったい何度、自らに問いかけただろう。

光をほとんど使い切って、疲れているはずの汐ノ香。それなのに少女のために、聖歌を唱ってくれる声が傍らで聴こえた。
——火の深淵よ、開け。

炎獄に行くのに、光はいらない。汐ノ香の歌を足掛かりに、少女は自らの翼を広げる。
魔女とは人間界と炎獄のため。教会にいる女性とは汐ノ香のため、少女は縁を繋いだ。
——碎けろ。滅ぼせ。呑み込んでしまえ。

この歌を教えてくれたのは、教会の女性だ。
あの女性は本来なら、汐ノ香に出会って心を救われ、色んな歌を教えるはずだったのだ。

わざわざそれを汐ノ香の上司、さざなみの天使が、女性を苦しめるために運命を変えた。少女が女性に手を差し伸べなければ、あの後どうなると思う？　と少女に笑いかけて。

——地獄よ。あの裏切者に、怒りを下せ。

頼んだ章節を、汐ノ香が最後まで唱った。同時に少女の翼も、自身の体の奥に繋がる。全身が燃え上がるように熱くなった。きっと汐ノ香から見ても、炎獄の火に包まれている。ローズさん！　と叫ぶ汐ノ香に何とか笑った。

人造の適当な観光地で底の浅いただの池が、砂漠と炎に変わる。少女を焼き尽くすと共に。

「……ダメだよ、ミサキ」

ふっと。父の核を隠す炎獄に、何をしても潜入しなかった少女に、誰かが囁^{ささや}いていた。その静かな声は遥かに遠くから、不思議とすぐ傍で、燃える少女の両肩を掴んで言った。

「まだラクトは、ここにはいないよ。だからミサキの風の翼は、もう少し待って」

炎獄の翼を起点に焼かれていく少女。その決意を留めるように、うっすら紫の影を持つ誰かが、何故か懐かしい声で優しく笑う。

「一人じゃ駄目だよ。兄さんがいないなら、わたしがいるから。だから、消えちゃダメ」

そう言えば、と、ふと気が付く。どうしてこの誰かは、自分をミサキと呼ぶのだろうか。そしてどうして、その名が自分であると、少女は自然に受け止めたのだろうか。

誰かの周囲には、白い霧が立ち込めていた。少女の炎をやがて消し止めると、ぽかんとしている少女に向かって、紫苑色の髪を持つ二つ括りの誰かが紅い目で笑った。

「まだ、ミサキになっちゃダメ。わたしが、いつかちゃんと、美咲の名前を付けるから。……もう少しだけ、トウカと待っていてね」

答える力が、少女にはなかった。目の前で微笑む相手が誰かわからず、どうして自分がここにいるかもわからなくなりそうだった。

赤い砂漠が薄まっていく。誰かの周囲から黒い闇が、少女を守るように包んでいった。

気が付けば、自然公園の池の前で草の上に座り込んで、「ローズさん！」と汐ノ香に強く揺さぶられていた。

「大丈夫ですか、ローズさん！」

汐ノ香の慌てようが、ただごとではない。そして、自分はローズ、確かそうだった、と少女もようやく思い出せた。

背中に先程具現させようとした翼は、以前のように大人しく、心眼で封じた洋服の中に引っ込んでいた。

「あ……汐ノ香、様？」

「気が付きましたか、ローズさん！？　もう、何でいきなり男の子になって、それで意識を失っちゃうんですか！　スカイさんも消えて戻ってこないし、何があったんです！？」

言われてはっとした。護衛の狼が周囲にはいない。先に炎獄に単身で行ったのだろうか。

「.....男の子？」

「はい。髪の色が変わって短くなって、全然ローズさんと似てない男の子が急に。私には、いつか助けに行くからね、って言っていました」

どういう事です？　と汐ノ香が首を傾げる。少女も正直、まだ意識が混濁している。

それでも一つだけ。良かった、と思った。

「そっか.....助けたって、思っているんだ」

「え？　ローズさん？」

もう刻限の少女を見る、汐ノ香の紅い瞳。

最後にやっと言えた。ロゼと呼んで下さい、と伝えて、少女の今回の召喚が終わる。

やがて消え始めた姿の上で、小さな青白い三日月が、夕空で二人を見守っていた。

十 終幕

良い知らせとは、真逆の悲報。

それでも再びさざなみの巫女が竜の墓場に顕れた時、少女はやはり、このヒトを信じよう、そう思えた。

「それでは……『雲居空』は無事、流惟様の命になったんですね」

「ええ、あなたの言う通りだったの。炎獄に座す赤の闇が、魔竜の紅い逆鱗を抑え込める——その奥には青い、空の光の魔物が眠っていると。教えてくれて、本当にありがとうね」

紅く長い髪の巫女が好む、草花もほとんど無い荒野で再会した。水も乏しい墓場の果てでは、地面の黒い亀裂がまるで細長い谷底だ。

流惟とは、少女の母が守り続けてきた大事な魔物だ。竜の墓場の番人の目すらも欺き、さざなみと母が取引をした大きな理由。

「桃花……魔竜を犠牲にする道だったのに、あなたはこれで、本当に良かったの？」

それは少女こそ、訊きたかった。何故ならこの相手がまさに、「桃花」の母なのだから。

「……桃花様を魔竜にすることを、お母様は望んでいませんでした」

「……………」

「風様こそ、桃花様を失って本当に良かったのですか？ お母様でも何でも利用すれば、桃花様を無理やり生かしもできたでしょうに……風様は、それをしなかった」

口にしながら、相手の気持ちは痛いほどに、本当は感じていた。虚ろな微笑みを崩さないまま、紅い髪のさざなみは立ち尽くしている。

「……助けられないことは……助けたい、と、望んでいけない理由ではないと思うんです」

少女も母も、もしも叶うなら、人の世界に出て父を探したい。「桃花」は母の器になれた。そして「桃花」が世で出会った者の一人が、限りなく父に近い存在だとすら聞いた。

何も答えられないままで、相手の姿が段々薄くなっていく。少女は最後に、少女なりにできること存在だけを、静かに伝えた。

「咲く様が、きっと、暁の光を掴み取ります。そこに桃花様もいる。まだ終わっていません」

本当は少女が持ったままでいたかった「力」。

「暁の光」を、少女は人世へ降ろすことを決めた。それは母の核となる「力」で、少女の大きな守りでもある。今までよりも炎獄の翼に少女が侵蝕されやすくなる現実問題や、唯一「暁の光」を受け取れる咲くも、魔竜となる危険性を今後抱えることになる。

それでも咲香は、桃花の実の姉だったから。

「スカイ様を、行方不明にしたお詫びです。赦して下さい——そしてありがとう、旦那様」
桃花の命を完全には消さない。少女と母が、「ここ」で身動きが難しくなったとしても。
紅い髪のさざなみは、最後まで笑ったまま、一筋の涙と共に完全に消えていった。

汐ノ香と仲良くなって、本当に良かった。

何かと打算の下に動いてしまう少女であるが、汐ノ香との出会いは数年後には、想像以上の禍福を少女にもたらしていた。

「お母様！ お父様が汐ノ香様に、天使用の人形を造って差し上げたそうです！ 何でも超一流の悪魔が素材なので、汐ノ香様が天の守護者として十二分以上に闘えそうです！」

さざなみの縁であるのかはわからないが、天使の汐ノ香は上司に注意するよう言われた不審者、蒼い目の何でも道具屋と出会った。

少女と汐ノ香は聖遺物を使った通信ができるだけだが、色んな地上の話を聴かせてくれた。

「力」しか墓場に残っておらず、心が人世にある母は喋ることができない。少女の言葉は解っているので、父について興奮して話す少女を膝の上で撫でながら聞いてくれる。

汐ノ香にはその何でも道具屋が、少女の父に近い者とは明かしていない。さざなみの縁にはなるべく深入りさせたくなかった。このまま天の守護者を汐ノ香が続ければ、炎獄へ行くことも避けられるからだ。

「『渦』も、汐ノ香様の力になってるようです。本当に世の中、縁とは不思議なものですね？」

今はまだ、優しい墓場で笑っていたかった。

風の翼が運ぶ悪夢に、いつか少女達の拙い花が、舞い散るその日が来ってしまうまで。

エピローグ

これは確実に、人選ミスでしょう、と。

狼の素因を持つが故に、無理やりある者の生け贄になってしまった女は、薄い青の目を持つさざなみの関係者にとりあえず微笑んだ。

「これ、ロゼたん達が怒りませんか？」

一足も二足も速く、地獄の火の池に訪れてみた女。赤い空の真下の砂漠で、まさかその薄青の目の男に利用されることになろうとは。

何かと女には誤算が多い。それでも墓場の少女と見習い天使、その二人と縁を持っておけたことだけは、後々に自身の命運に感謝する。

炎獄の翼とは、天の翼の紛い物だ。天使の翼もそもそもは、世界樹が編んだ光の使い回し。

だからお世辞にも、その赤黒い翼は出来が良くない。元々の透明な翼に、黄昏の光の一部を引き出す赤の闇を混ぜて、炎獄からの影響を極力減らした。

そんな翼を持った彼を、複雑な縁で召喚したある少女が、かっこいい、と目を輝かせた。

「あのね、兄さんを一緒に探してほしいの。でもアナタは、悪魔じゃないね.....??」

悪魔使いという少女に、彼は「ミサキ」の契約名を貰う。友達の天使が消えてしまった後のことで、それは少女の兄のせいだった。

炎獄の翼で火の池を渡る、彼と同じ世界を見る者。白い風に煽られる^{みそぎ}襦の幕が上がる。



<https://xfolio.jp/portfolio/sky/works/5263803>

残紅六花

著 者 pierrette***

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
